
月 刊

MéLange

Vol.135



2018.07.29

詩と評論

月刊「MéLange」

Vol.135 2018.07.29

「月刊めらぶじゅ」編集部

詩・短歌

- 豆腐 ……………中嶋康雄 03
- アスファルトの路上 ……………野口裕 04
- 雨季……………にしもとめぐみ 06
- 詩人―前登志夫没後十年に寄す……………吉野節子 07
- うすやみ／からまり ……………大橋愛由等 10
- Mom's birthday―不思議な食欲が露わになって床に落ちた……………福田知子 12
- 快晴、三木への行き方……………大西隆志 13
- いつもの道／こわれる後に ……………高谷和幸 14
- つかのまとはいえ ……………北岡武司 15

読書会資料

- 吉野節子が選ぶ前登志夫の二十九首……………吉野節子 08

お知らせ

- 野口裕著句集『のほほん』出版記念会のお知らせ……………図書出版まろうど社 05
- 第21回ロルカ詩祭のお知らせ……………ロルカ詩祭実行委員会 11

連載／エッセイ

- 神戸詞あしび 124 「兵庫県という空疎な国策県は必然なのか」……………大橋愛由等 16

編集部だより★55／詩友たちの父上の逝去が続いた。訃報はつづくものである。わたしの父は2010年に亡くなっている。1926年（大正15=昭和元年）生まれなのでちょうど昭和の年の重なりと一緒にいる。享年は83歳だった。この世代の男性は戦時色が次第に濃くなっていく時代相のもとに生まれ育ったため長生きできるとは思っていなかったようだ。国家は若者を戦場にかりたて、死ぬことを洗脳していた。父は満州建国大学を繰り上げ卒業させられ、昭和20年春に広島県大竹市に向かいシベリア抑留を免れた。特攻艇「蛟竜」の乗船訓練にあけくれているうちに8月15日の終戦の日を迎えた。「蛟竜」はいわば海の特攻なのだが、父には「特攻くずれ」のような顔廃したものではなく、学徒兵はいずれどのような形であれ、戦死するものだと覚悟できていたからか、特攻で生き残ったという陰は感じられなかった。むしろ海軍でたたきこまれた手旗信号などをわれわれ幼い姉弟に教えたりもする生真面目さがあったのである。部隊が解散して父は家族が疎開している奈良県に向かった。家族は、親戚が住む庄屋階級の大きな大和棟の一室を借りていた。そして父の父であるわたしの祖父は家族と離れて大阪にいて戦時中なかの商売をして生き抜いたのである。そのたくましさはとうてい私の及ぶところではない。★第135回「Mélange」読書会でとりあげる歌人・前登志夫も父とおなじ1926年生まれ。やはり父とおなじ人生の荒波をなんとか乗り切って生きぬいたのであろう。ただこの歌人は吉野の山中に依拠して、吉野の自然、風土、民俗とともに生き抜いた人生であったことは街に生き街の雑踏にまみれて生きていた父と異なるところである。（大橋愛由等記）

◆豆腐

中嶋康雄

感動的な豆腐をささげ持ち
 錆だらけの自転車をこいでいる
 アスファルトの溶け具合が
 側溝にたどり着く
 雨に濡れ
 てらてら
 光る猫の糞に群がりながら
 今朝のだんご虫が困っている
 自転車はハンドルも歪んでいる
 吐息が廃れている
 「喜びが残念ながら・・・」
 皆で涙を流す美德
 無数の空き缶
 膝を抱えている
 お供え物の饅頭を盗み
 貪り食って
 それでは足りず
 困っているだんご虫にも
 手をのばす
 びっしり生えた微細の足が
 歯にひっかかる
 状況はとも悪い
 収入はとも少ない
 健康は奪われている
 景気はよいはずがない
 自転車はつまらない水溜まりの泥をはね
 真っ白な豆腐が穢される
 猛烈な怒りのとよめき

声をはりあげるたびに
 身長が縮んでいる
 感動的な豆腐が穢れたまま
 空いつぱいに広がって
 ぷるぷるふるえているけれど
 目の前のひっくり返っている肥満の男を
 磨り潰し
 床に練り込む作業が先で
 終わったら油と血まみれの道具を洗い
 清めの熱湯風呂に入って
 絶対的な正装をして
 絶対的な定刻に報告にいかなければ
 殺されるはず
 殺される
 ひっくり返ったゴキブリみたいに
 殺されるはずだが
 報告にいつてもあまり
 いいことはない夜の工場で
 豆腐をつくる
 目脂が落ちる
 女工場長が鞭を持って近づいてくる
 星が豆腐に覆われている
 振り下ろされる鞭
 理解不能の新しいお笑いコンビが登場し
 こんなものを笑うくらいなら
 穴に閉じ籠もって
 「瘦せたあれと語り合おうよ」
 やはり
 豆腐が必要だ
 どんなに無意味であっても
 よいあんばいに豆腐を腐らせるには
 ぶあつい教えを引つ張り出さねば
 女工場長があれに密会し
 体と豆腐を差し上げる
 夜の軋み

野口裕

夏至を過ぎてひと月
 じいじいと鳴く
 今を盛りと蟬の
 しかし夕暮れもほど近い
 雲間なく油照りの上り坂
 背丈より高く
 すんすんとした雑草に
 あとどれほどだとつぶやく
 帰り道のようにあり
 帰り道ではない
 何を待っているのか
 分からないままつぶやくと
 眼は自然とうつむいて
 青い死骸を運ぶ蟻の道

野口裕句集『のほほん』の出版記念会を
 8月26日(日)に神戸で開催します

野口裕句集『のほほん』(図書出版まろうど社)について、作品世界を語り合う俳人・詩人たちの会を8月26日(日)に開催します。午後6時から始めます。

- ★句集『のほほん』から10句を選句してください。
- ★詩人の方はこの句集に刺激された詩稿を作ってメール送稿してください(ただし強制ではありません)
- ★選句した10句は、8月22日(水)までに、以下のメールアドレスに送信してください。

堀本吟 <guinet@m5.kcn.ne.jp>
 あるいは
 大橋愛由等 <maroad66454@gmail.com>

★当日、送っていただいた10句選を小冊子にまとめて配布します。野口さんの作品世界をみなさんと堪能し、反復し、愉しみ、これからの野口さんの句業を励ましましょう。

★開催日時/2018年8月26日(日)午後6時から

★会費/5000円(スペイン料理のコース料理を提供いたします。飲み放題です(時間制限は緩やか))

★会場/スペイン料理カルメン(078-331-2228)神戸市中央区北長狭通1-7-1カルメンビル2F(JR神戸線「三ノ宮」駅下車4分、阪急神戸線「三宮」駅下車1分)。創業1956年の老舗レストランです(大橋愛由等が二代目オーナーを務めています)



図書出版まろうど社
 代表・大橋愛由等
 〒658-0016
 神戸市東灘区本山中町4-14-19

◆雨季

にしもと めぐみ

朝雨は長く降り続いた
雨は全てを閉じ込め 隠ぺいする

刑が執行された

2018年7月6日 8時頃

人々を震撼させた事件から二十三年

雨は長く降り続いた

やむことを忘れてしまったかのように

人災は突然降りかかる

天災は避けようがない

麻原彰晃 六十三歳

早川紀代秀 六十歳

遠藤誠一 五十八歳

中川智正 五十五歳

土屋正実 五十三歳
新見智光 五十歳
井上嘉浩 四十一歳
執行 上川陽子法相
地下鉄サリン事件 死者十三人 負傷者六千三百人超え

区切りとなったと遺族が……
安らかに眠って欲しいと……
命で償ってもらいたいと……

雨は長く降り続く
人を狂気に駆り立てる雨
雨……

付記

8月26日執行

林（現・小池）泰男 六十歳 〓 仙台拘置支所

岡崎（現・宮前）一明 五十七歳

横山真人 五十四歳 ともに名古屋拘置所

広瀬健一 五十四歳

豊田亨 五十歳 ともに 東京拘置所

端本悟 五十一歳 東京拘置所

◆詩人——前登志夫没後十年に寄す

吉野節子

ジャコメッティの男歩みきてよく見れば一行の詩なり読めぬまま消ゆ
十年経ぬ 桜を尋ねて登り来れば奥千本に満つるしづけさ

酒樽には樹齢八十年ほどの杉がいいんだと樹下山人は

草合さんはちやんでら大将、峰子さんはざしきわらし 弟子に渾名をつけて満悦

珊底羅大将は室生寺十二神将の未神。頬杖をついたユーモラスな像。

人間が面白うないと歌はおもしろうない 宣ひし御仁のおもしろさこそ

うそまこと交へて語るその舌の長かりしこと 詩人の舌よ

ある日ふと賢治の童話数ページそらんじ始む舌いきいきと

芸術を生きむと若き賢治、登志夫葛藤長し厳父の下に

自らをマザコンと呼ぶ木漏れ日の青き童子は翁なりけり

ユーカリの空洞に響かふディジュリドウの地より湧く音天にひびけり

オーストラリア・アボリジニの楽器。

文明の快楽尽き果つ 山人の野生の聲を重く聴くべし

片手上げ去りゆく後姿ゆつくりと樹樹の中ゆく瘦身ひとり

熱爛に割箸差して杉の香にほのぼのとめるゆふべ帰りて

吉野節子（よしの・せつこ）略歴

一九四五年満州国吉林市生まれ、高知県育ち

三七歳秋前登志夫に会い作歌を始める

一九九五年歌集『深層海流』

二〇〇三年歌集『をみなごみな』

二〇一六年歌集『加良怒』で大阪短歌文学賞受賞

前登志夫の短歌

吉野節子選

『子午線の繭』より

かなしみは明るさゆにいきたりけり一本の樹の翳らひにけり
ひと冬を鳴く鶉ひはありきたましひは崖にこぼる土くれの量かさ
わが柩こひとりの啞おに担がせて貧のかけ透く屋根越えにゆけ
葺ふいま暗闇の土に頭あぐ月の出の暗きくらき時なり

もの音は樹木の耳に蔵しまはれて月よみの谷をのぼるさかなよ
おお退屈たいくつきはまる風景搔かき消してふる霧のなか走れ樹木は
涯きりぎりぶたふ夜の電車にひとり酔よふ離れゆく都市はすでに崖
敵意あるがごとくきこゆるピアノあり夕映の高き岩のなかから

のこぎりの叫ぶ森あり揺れる首埋めむとして樹のなかの雪
音のなき夜の稲光いなひかりわれの手を切り足を切り薄き耳を切り

地下鉄の赤き電車は露出して東京の眠りしたしかりけり

夕闇にまぎれて村に近づけば盗賊のごとくわれは華やぐ

暗道くらみちのわれの歩みにまつはれる螢ありわれはいかなる河か

相寄りて知る罪ありき血の落暉らくき窓まどにありしが雪ふりしきる

見知らざる日の生の量かさ、風落ちて山の間まに眠る人ふたりあり

『靈異記』より

帰らむと河を渡ればももづたふくらみはありき夜の食おす国

この父が鬼にかへらむ峠たもとまで落暉らくきの坂を背負はれてゆけ

樹木みなある日はゆらぐ行きゆきて乞食こじきの掌てのひらに花盛られけり

あしびぎの山の泉いづみにしづめたる白桃しろももを守れば人遠みかも

花折はなぞのわれは旅人いんたき頂いただきのかなたはつねに奈落ならくなりにし

『樹下集』より

銀河系ぎんがけいそらのまほらを墮おちつづく夏の雫しずくとわれはなりてむ

みんみに法師ほうし蟬せみまじり啼なく昼ひるを吉野きちのの山やまに経きやうくちづさむ

一山ひとやまのかなかな啼なける夕ゆふまぐれむらぎも蒼あざくもどるけもの道

はたた神かみまたひらめけば吉野山きちのやまさくらは夜も花咲かせをり

ひぐらしの聲こゑあはせ鳴く朝あさあけをよぎりしひとに海うみあふれぬつ

歳木としぎ樵せうるわがかたはらにうつくしき女人にょにんのごとく夕日ゆふひありけり

『青童子』より

母ははに抱かかれがムラン聴きしとおもふまでガムランかなし熱帯ねつたいの島の

『落人の家』より

荒あき血ちのかすかに残のこるうつしみは早池はやいけ峯のねの山やまを登のぼらむとする

『野生の聲』より

山やまかけの沼ぬまに群ぐんれをるおたまじやくし春はるのえにしを忘れざらめや

前登志夫（まえ・としお）略歴
一九二六年 奈良県吉野町生まれ
一九五五年より詩から短歌に転ず
第三歌集『縄文紀』で逡空賞受賞
その後、読売文学賞、毎日芸術賞
二〇〇五年日本芸術院賞、恩寵賞受賞
生涯吉野山中に棲み、エッセイ集多数
二〇〇八年生家にて逝去

大橋愛由等

新月から吹く風は含羞を忌避するだろう

(朝からずつと微苦笑していたのは多神を呑みこみすぎたわたしとあなたの思い違いであり、四ツ目の信号の気が変わらないうちに、いま来た道をすぐ戻ってゆく覚悟はないことは分かりきつていて、蛸が思念したアリストテレスの詩学も、ヒメトガリヨトのためらわれない直角飛行も、ゼル状を思慕する鉱物Aも、小糠雨だけをさけるためだけにある蛇の目傘も、黄蘗色の色鉛筆に塗り込められたB4用紙の画用紙に収斂していくのだとすれば。山上の楼閣を毎日みつめていたわたしとあなたはそれが既に廃墟となつてゐることを相手は知らないだろうと決めつけて、濡れた地面をさまよう百足を嗤うことも、三年ぶりに敗残のままに戻ってきた七月の風に声をかけることも、沈黙しつづける公園のベンチにふたりそろって座ることも、それは山折りと谷折りを間違つて卑小な紙の塊となつてしまつた折り紙のようなものを見つめる醒めた目線に似ているとしたら。「鶴と亀がわたしとあなたの肩に寄り添おうとしている」とふと発語したあとに、今年と去年の夏空の〈青色〉を正確に差異化できる蛸に会いに行くべきか、捜し物を探す旅にでるために通行証を新月に晒したほうがいいのか、互いに寂しがり屋と言いながらないがしろにしてきた共感覚が摩擦していくさまを黄蘗色で書き記したほうがいいのか、わたしとあなたはゆっくり崩れてゆく薄闇のなか、いそいで買ってきたお得意割り箸を取り出しひとつずつパチンパチンと割きながら、これが二人の実存なのだと思ひ込もうとしているのだった。

大橋愛由等

百黙はずらにからまれ歓喜する

(蜘蛛が疾駆していく先は百年前に船崩しの海風が閉じ込められ眠り続けている島の突端にある灯台なのだとしたら、滑空する蝶の行き先は雲と雲との間に隠喩されているひとびとの笑いが墮ちていく山の端のありかなのであり、朝の鴉たちのディアローグが交わされているのは山の向こうの今夜の困惑とひとりよがりな会話の破片がころがる小谷の木陰なのだろう。長くつづく白い壁がいつのまに構築されているその界限ではこちらとあちらの修辭が日々少しずつくずれていくことを蝶も雲も知ってはいるのだがそのズレの早さはぼくとあなたが言い争っている間に冷製オニオンスープがぬるくなつてしまふぐらいの速度。パブロ・ネルーダがマルティン・ブーバーの翻訳書の中に差し込んでいたはずがいつのまにかなくなつてしまつた紙片に書かれていたのは蝙蝠がある坂の街でみいだした泣きやまない闇のかなしみでありぼくとあなたがかつて訪れた岬で風たちが歌ってくれたオリブの樹木と魚たちの輪唱の歌詞が書き留められていたのだけどあなたは紙片がどこにもないことを昨日も今日もうつつむき続けてちよつぷりの言葉さえも語ろうとせず新たな紙片を持つとも見ようもしない。壁の向こうに飛んで行った蝶を裏声を使って呼び止めよういちど泉について語り合おうとするのがいいのかそれともこのまま患者の物真似をする患者のように坂道をシニカルな笑顔をうかべて下るのがいいのか決めかねている間も蝶は振りむきもせず遠ざかつていきひとり歩きに最適な竹杖を握りなおしているのである。

第21回

ロルカ詩祭

ロルカ生誕

一二〇年記念



2018年

8月18日(日)

歌え悦べ 夢遊病の乙女のごとく!!

ロルカ詩祭への誘い 北岡武司

おいフェデリコ、下を見てごらん。あたいらはあなたを見あげているんだよ。あなたの霊から発した言葉に震え、腕の肌は鳥肌だっているよ。おなじ定めが無限回くりかえされようと、この命を無限回生きてみようって、そんな気持ちにしてくれるのがあなたの詩さ。あなたは天の国でも神を褒め称える歌を歌い続けるのだらうさ。戦にも革命にも義なんかあるものか。内乱は獣どもの争い。されど、ジプシーたちが緑の風を喜び歌い踊るのを、ともに喜びぬ者たちがいれば憤りが沸き起こる。友よ 緑の風の喜びに唱和しよう。その後、怯えながら殺されようとも、夢遊病の乙女をめのごとく、ものみな一切をめめよう。詩人を褒め歌おう。友たちよ 喜び歌おう。この瞬間、この時、輝きいでる永遠こそがわれらが救い。銃殺も時のなかの一幕にすぎぬ。アルファカールまじかで銃殺されたロルカが夢遊病の乙女をめだてごときこの場に集い、あたいらもロルカを褒め称えよう。友たちよ ともに喜び歌おうに唱和しよう。

出演予定者

朗読詩人(順不同) / 鼓直、瀬崎祐、今野和代、大西隆志、高谷和幸、高木敏克、北野和博、秦ひろこ、大橋愛由等、木澤豊、安西佐有理、福田知子、千田草介、情野千里、にしもとめぐみ、北岡武司

演奏 /

住田政男(フラメンコギタリスト)

〈襲撃スケジュール〉

2018年8月18日(土)午後5時 開場

「1部」PM5:30~PM6:00

フラメンコギタリスト・住田政男による

オリジナル曲「秋麗」演奏

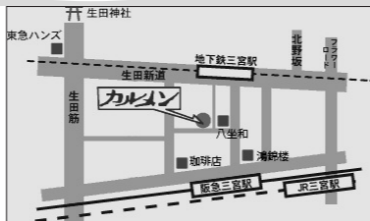
「2部」PM6:15~PM8:00

詩人たちの自作詩朗読

〈場所〉スペイン料理カルメン(神戸市中央区北長狭通1-7-1 711)電話078-331-2221・2220(6500012) JR・阪急・阪神・地下鉄「三宮駅」から徒歩10分、(料金)A3600円(チャージ込)(1)夏の特選スープ (2)季節のサラダ (3)メインディッシュ (4)パエリア (5)コーヒー (6)デザート B2600円(チャージ込)(1)ワンドリンク(選択可) (2)特選タパス 当日参加者の方全員に、第一部参加の詩人たちが朗読する詩作掲載の「八月・九日詩集・VOL.2」を進呈します。

会場 スペイン料理 カルメン

☎078-331-2221 神戸市中央区北長狭通1-7-1



◆ Mom's birthday

—不思議な食欲が露わになって床に落ちた

福田知子

昔の思い出話をしたり、親しかった人たちの名前をあげていたら。涙が出てきた。表情の乏しくなった父の眼からふいに。私が別の土地で放蕩していたとき、突然私を尋ねてきた私の友達、私のいない家に泊まっていった母の女学校時代の親友の娘に震災前のポトアイランドを案内した話。実父とはあまり上手いかない彼女は父に誰よりも懐いていた彼女の結婚前の微妙な時期に寄り添い。母が留守のときに三重から訪ねてきた私の友達に味噌汁をふるまった父。その日以来、お父さんの味噌汁は語り草になったそのひとは去年死んだ。80歳のお母さんから東京のホテルで一人死んだことを告げる手紙を貰った。Mom's birthday—母の卒寿の誕生日だというのに、ケーキを出す前に酔いつぶれてダウン。用意したケーキは冷蔵庫に再びしまわれた。だから家でお祝い会なんていやだったんだ。人前で入れ歯を外すほど認知症の進行した2人をレストランに連れて行くわけにもいかず。母も父もステーキをスルツと食べて、スモークサーモンも残さず食べた。昔好きだったという記憶でスルツと食べた。おまけに父は落花生の甘煮までスルツと食べてしまった。入れ歯も外さずに。不思議な食欲が露わになって床に落ちた。イタリアンパセリまで美味しそうに食べて知らん顔した。あらま、いったい人が生きるといふことは何なのか…なんという記憶の井戸に。忘れ去った食欲まで浮かべて。私は皮肉にも騒々しい老いた家族の振る舞いにかなり呆れながらどこか新鮮であらたな生や生殖の成れの果ての家族というどこまでも切れないしかしいつときいつときの繋がれる長くも切れ切れの時間の奔流に押し流され翻弄されながらも明日からは普通の生活に戻るのだろうか。しかしあんた、それはウソやないの？と誰かに問いただされる、と少しだけ考える…。いずれは床に落ちるにしても…。死んだ人たちの声が折り重なって聞こえてくるのは決まってこんなときだ。

◆ 快晴、三木への行き方

大西隆志

のりかえの時刻表
探してみるが未見
台地の裾を東へと
天頂からの視線は
真昼を貫くように
まばろし野で蹲る
湧水を求めたのは
青い時代の少し前
自転車漕いでの
速度は草叢を破り
崩れる空に響く音

河川敷に撒かれた
森の雫を流し込み
流木の孕んでいる
逆さの時間を辿る
くにかね、国包と
地名の横を過ぎる
廃線跡を走るバス
脇腹のキャンパス
レールに大河刺し
美術家は散歩から
帰ってこないのだ

洪水に悩む土地で
築いた丘への視線
榎、椋、見え隠れ
死者への敬意の径
まもなく三木へと
バスに囲まれた地
埋もれた港からは
吹き抜ける泉の夢
警笛の整列に沈む
あらがうのは晴天
見えない渴きの罅

◆いつもの道

高谷和幸

いつも通る道に
黄色い花の白い服を着たひとが
入口に立っている
向き合っている
振り返っている
そうすると滲んでいく
大気と水面のあいだ
流化し
そのひとの新しい名の
その音
単語シュークエンスの呼び声
壺のかたちの
底にある水をのぞいている
解析できない名前と
復唱する声が
波紋になる
ちくちくする痛みが広がっていく
いつも通る道になぜ
食べかけの肉の塊が置いてあるのか
いたるところが息をしている
かのように

◆こわれる後に

高谷和幸

あるときから
不定法で呼ばれた
その
黄色い花の白い服を着たひと
そのひとには
海があり
芥子の実の季節も
同等にある
どれぐらい
ひとであることが
その一つであることが
何をなしているのか
透明化してゆく煙と
四歳の男の子と
一歳の女の子がソファアに
坐る
ここにこわれたものが
あらゆるものの一つと
同じ冠詞で
躲している

◆つかのまとはいえ

北岡武司

砂の波がうねりうねり後方へ飛ぶ。さわれば掌を火傷するだろう。砂に囲まれた瓦礫からビルの骸骨がつきだしている。今にも倒れそう。防護ゴーグル越しに目をやるキャシーの脳裏にタリバンタリバンの隠れ家の図がくつきりと映しだされる。地下室の構造と配置は三日前からたたき込まれた。死んでも忘れないだろう。ブリーフィングでキャシーらをインスパイアし、エンカレッジした少佐の顔も思いうかぶ。

横たわった女のくぼみと膨らみ。思わず触れたくなる。うねった砂の波が後方へ飛ぶ。さわれば掌を火傷するだろう。男が女にさわったときのように。フロリダでもオークランドでもホノルルでも見たことがない空の色。三か月見あげた湿気をふくまぬ大気。シリアの青。青を通して永遠がときのなかに語りかけてくる。砂

の波は機体さえ熱で溶かしてしまえそう。砂漠でなくとも人はつかのまの命しか生きられない。つかのまの命でも生きねばとキャシーは思う。

眼下に水酌み場が見える。女が大きな壺を頭にのせ井戸に近づく。砂漠の女はときの大半を水酌みと水運びに費やす。仕事をとりあげれば人生は空っぽだ。人生を有意味にしようと、空っぽの人生を生きる人々が寄付を募る。大切な人のために水を酌み水を運ぶ。激しい太陽の熱と砂漠の照り返しのなか、息もとまりそうな熱い空気を気管に吸いこみ働く。大切な水。水を汲んだばかりのサマリア女にイエスは水を求めた。かわりに永遠に乾かぬ水を上げよう、と。

瞬間、瞬間に永遠があらわれる。シリアの青の下でも。フロリダでもオークランドでもホノルルでも。知っているのに私はいく。大切な人たちのために。膝のうえのマシンガンにそえた両手が震える。膝も震え踵が床で音を立てる。マイアミにいる息子のため。トキオにいる恋人のために生きる。任務が完了すれば息子とトキオへいく。神よ わたしを守ってください。トキオで息子と彼と三人で暮らせませすように。



神戸市にある兵庫県庁

▼06*13/能吏である現知事は、兵庫県政初の5期目。今期でおわりだろう。そつなく県政の舵取りをしているという評価がある。では次も兵庫県知事の太い流れであるへ東大↓旧内務省・自治省・総務省)出身の後継者をかっさだすのか(阪本勝のような例外者もある)。兵庫県民はこうした中央官僚出身知事が続いているのに慣れさせられている。

▼06*14/もともと兵庫県という自治体は実体があるのだろうか。私のひとつ上の世代の表現者たちは兵庫県という存在を実体として受容していた。しかし私は明治維新によって生まれたこの県は、国策によって生まれた人造県であり、同県を構成する五つの地域を統括する地政学的必然はないと思っている。

神戸・長田にあるインターネット放送局・FMわいわい「南の風」で「奄美にとって明治一五〇年を問う」シリーズが七月からスタートした。そこで考えた。ではわたしの地元である兵庫県でのこの明治一五〇年についてどのような動きがあるのか。そしてわたしはどのように向き合っているのか。ツイッターに書き込んだ内容にそって紹介することにしよう。

兵庫県という空疎な国策県は必然なのか

▼06*13/わたしのような立場で批判する人は多くないだろうからあえて書き込む。今年「兵庫県政一五〇年」だそう、兵庫県の肝いりで記念行事が組まれている。「県政一五〇年」という仕立てそのものが「上から目線」である。決して「兵庫県一五〇年」「兵庫県民一五〇年」ではないからだ。「県政一五〇年」を祝う「県民」はどこにいる。(いきなり過激な発言をした。もともと兵庫県は幕府の直轄地であり、できたばかりの兵庫県の県域にはいくつかの藩の飛び地が細切れのように領有していた地域だった。このため維新政府の直轄地としてもスタートしやす環境にあった。)

<p>詩と評論 月刊「Mélange」Vol.135 神戸</p>	<p>2018年07月29日 通巻135号 発行所/月刊「Mélange」編集部 〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F 編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人) maroad66454@gmail.com 定価600円(税別)</p>
---	--